

## 別 れ（前半）

担当：鷺巣 力

### 梗概

本章では、ふたつの「別れ」が二項対照法によって描かれる。ひとつはフランスあるいはフランス文化からの「別れ」であり、もうひとつがフィレンツェで知りあった娘（実名ヒルダ・シュタインメッツ）との「別れ」である。留学当初、加藤は東京やパリといった大都会というものがどこでも似たりよったりのものだと感じており、留学期間は一年で十分だろうと想定していた。ところが、しばらく滞在すると、その国の奥の深さが分かるようになり、一年程度の滞在ではとうてい理解できるものではないと考えはじめた。さらに滞在すると、その奥行きはとめどもなく深く、入れば入るほど奥底に吸いこまれるような感覚に襲われた。ついには自分を見失うような、戦慄に近い怖れを抱くにいたる。そして帰国すべきか帰国すべきではないかについて迷い、にわかには決しかねていた。ところが、決断を外から強いる事態が押しよせてくる。それがもうひとつの「別れ」である。フィレンツェで知りあった娘がロンドンで働いているところを訪ねた（「海峡の彼方」）。しかし、娘とは別れるつもりでパリに戻り、届いた手紙にも返事を書かなかった。不審に思った娘はパリに加藤を訪ねる。その姿を見たたん、娘と別れる意思は崩れ、この娘と一緒に暮らすことを決意する。その決意を実行するためにも、日本に帰らなければならない。その娘とは「別れる」どころか結婚する意思を固めることとなり、フランスおよびフランス文化とは、その後も長く付きあうことになる。ふたつの「別れ」について考えたものの、結局、ふたつとも「別れられない」結果となった。加藤の「別れ」をめぐる逡巡する姿が描かれる。

第 1 段落 (154 頁、改 175 頁)

英国から帰った私は、フランスで、外国人の労働の許可証をもらった。それは一年ほどまえに申請して、ほとんど忘れかけていたものだが、私の経済的な困難を一举に解決するはずであった。許可証を申請したとき、すでに国立の研究所に働き口があった。その研究所に戻れば、私は暮しをたてることができるはずであった。

(1) 「英国から帰った私は……」

- ① 英国はドーヴァーからフランスのル・アーヴル（ノルマンディー）へ船で戻る
- ② 船舶による帰還⇔ドーヴァー海峡の海底トンネル（全長 50.5km、海底部 37.9km）の開通は 1994 年

(2) 外国人の労働の許可証

(i) 半給費留学生

- ① 加藤のフランス留学が「半給費留学生」であったことは『正編』「京都の庭」に既述
- ② 「半給費留学生」とは、学費は免除、渡航費および現地での生活費は自弁
- ③ 生活費を調達するには、臨時であろうと、なんらか労働に従わないとならなかった
- ④ 正式な「外国人労働許可証」を得たほうが多くの収入を得られやすい

(ii) 外国人労働許可証

- ① パリで暮らすために「外国人労働許可証」を申請し、ようやくその許可が下りた
- ② 「経済的な困難を一举に解決するはずであった」し、「暮しをたてることができるはずであった」と「はずであった」を繰り返すのは、実際はそうならなかったからである。そうならなかった理由について述べるのだが、そのまえに何故申請するに到ったか、その理由について語る

第 2 段落 (154—155 頁、改 175—176 頁)

私はそれまで日本の新聞に原稿を送って生活の資とし、必要に応じては通訳などの仕事をし急場をしのいでいた。しかし欧州の滞在が長びくにつれ、日常の見聞を短い文章に綴って新聞社へ送るという仕事は、私の興味を惹かなくなった。通訳にもはじめは好奇心があったが、やがて同じことを——すなわち日本人と西洋人との間で、意思の甚だ通じ難いという事実を、何度確かめてみたところでもおもしろくないと思うようになった。しかもそれだけではなく、新聞にしても、旅行者にしても、要するに私の商売の相手が日本側であるかぎり、西洋の生活の半分しか知ることができないだろう、とも考えた。経済の下部構造が日本社会に組みこまれたままで、外国の社会の上部構造を内側から理解することは、不可能ではないにしても、困難であろう。フランスで暮すかぎり、職をその土地に得ること、その職の表芸であることが望ましかった。私の表芸は、内科学、殊に血液学の臨床と研究である。そういう専門化した仕事は、大がかりな病院か研究所にしかないが、パリの大病院や研究所は、すべて国立である。個人の事業ならば、時と場合に応じて、非公式の月給の融通もつくかもしれない。国立ではそうはゆかない。職を得ると同時に、外国人労働局に正式の許可をもとめたのは、そのためであった。

(1) 「日本の新聞に原稿を送って生活の資とし、……」

(i) 西日本新聞社との特派員契約など

- ① 加藤は西日本新聞社と特派員契約を結び、ときおり寄稿。  
留学中に寄稿した本数は 54 本に上る（留学以前から、留学以後も同紙とは関係があった）
- ② 東京の出版社の発行する雑誌にたびたび寄稿  
『芸術新潮』『文学界』『群像』『新潮』『文藝春秋』など多数  
その記録は矢野昌邦編「著作年譜」（自選集 10 巻末収載）に詳しい

この頃には、のちの加藤の主たる発表の場を提供した、朝日新聞社や岩波書店の媒体が含まれていないことに要注意

(ii) 通訳

- ① あるいは日本人がヨーロッパに来ると、その**通訳**などの仕事にも就いた(「故国の便り」「冬の旅」)
- ② こうして得た収入を生活費に充てた
- ③ それでも足りずに妹久子さんに借金

(2) 仕事の動機と問題点

(i) 動機

- ① フランスに留学した当初、加藤は見聞きしたことに驚きを感じ、理解したことを日本の読者に伝えたい欲求を強くもっていた  
☞加藤の「書く理由」は、フランス留学中のみならず、ここにある
- ② 旅行者の通訳をしてフランス人と日本人をつなごうとした

(ii) 問題点

- ① そんなことをいくらしていても、フランス文化を深く理解することにはならない。それが「**経済の下部構造が日本社会に組みこまれたままで、外国の社会の上部構造を内側から理解することは、不可能ではないにしても、困難であろう**」という件である  
☞収入は日本との関係で得ていて、学ぼうとするのはフランスおよびフランス文化  
☞この表現は加藤のマルクス主義に対する共感を意味する
- ② フランス文化を深く理解するには、「**職をその土地に得ること、その職の表芸であることが望まし**」いと考えた  
すなわち、医学関係で職を得ることが望ましい
- ③ ゆえに「外国人労働許可証」を取る方がよいと考えた

第3段落 (155—156 頁、改 176—177 頁)

しかしその頃フランスでは、日本人が学生の資格で、一年の滞在許可を申請するのにも、かなり面倒な手続きを必要とした。労働許可の申請は、それとは較べものにならぬほど手がこんでいた。私は何度も役所に出頭し、研究所の証明書や警察の書類を整えるために長い時間を費した。警察の男は、しばらく私を待たせたあとで、厚い書類をとり出すと、それを眼のまえで開きながら、「なるほど、君は昨年南仏に行ったことがあるようだね」などといった。「たしかに行きました」「何月何日に」と男は私の忘れてしまった年月日を詳しくいい、「アヴィニヨンにも泊っている」といったのには、おどろいた。「それからエックス・アン・プロヴァンス……」「それがどうかしましたか」「いや、何も不都合なことをしていなければ、よいわけだ」と男は、横柄に呟いた。私はいつぞや街頭で私服の警官によびとめられた時のことを思い出していた。そのとき私はひとりで、地下鉄の出口で買った二つ三つの新聞を抱え、凱旋門のそばの通りを歩いていた。「ムッシュウ」という声が突然背後から呼びかけた。振りむくと、見知らぬ男がさっと近寄り、警察の証明書——であったのだろう——を見せたかと思うとひっこめ、ただ一言「身分証明書」といった。その態度は傲慢で、ひったくるように取上げた居住証明書や旅券を、しばらく検べていた後、そのままつき返すのに何の挨拶もなかった。おそらくそういう役人たちも、家に帰って子供と戯れているときには、よい親父であったろう。私の人相がよくないのかもしれない、と私は警察へ行くたびに考えた。

(1) 日仏関係

- ① 1855 年、フランスは琉球（現沖縄）とのあいだに条約締結
- ② 1858 年、日仏修好通商条約を締結
- ③ 第二次大戦で日仏外交関係は断絶
- ④ 国交回復は 1952 年だが、それ以前はパリ在外事務所があった
- ⑤ 事務所に萩原徹がいて、森有正や加藤周一が世話になった

参考文献：加藤『運命』、『羊の歌』、萩原徹追悼集刊行委員会『追悼 萩原徹』

(2) 滞在許可・労働許可申請

- ① 加藤の渡仏は、日本の被占領時代⇒旅券発行も GHQ
- ② しかも日仏には国交がない
- ③ 申請・認可は難儀をきわめ、長い時間が必要だったろう

(3) 警察の捜査能力

- ① 警察は権力の下部組織
- ② 公安関係の捜査能力は総じて高い
- ③ 日本でも

(4) 「そういう役人たちも、家に帰って子供と戯れているときには、よい親父であったろう」

- ① これと酷似する表現は『続羊の歌』「信条」にある

「その同じ人間が、昨日までは中国の大陸で人を殺していただろうことが、どうして折合うのか」

- ④ 〈どんな人間でも悪魔ではない、戦争はどんな人間でも悪魔にする〉という人間観  
⇒これが、加藤が死刑反対、戦争反対を唱える理由のひとつ

第 4 段落 (156—157 頁、改 177—178 頁)

しかし手続きの面倒は、警察との付き合いのばかばかしく長い時間だけに、係るものではなかった。そもそも規則書には、外国人の労働は、フランス人を以て代え難い職場にかぎると明記してあって、ようやく不足しかけていた筋肉労働者の仕事、道路工事や家事労働の類を除けば、そういうことがめったにありそうにも思われなかった。現に噂によれば、その頃外国人労働許可証をもって、正式にフランス側の事業や機関に働いていた日本人は、在留邦人数百人のなかでも、例外中の例外で、たしかに「フランス人を以ては代え難い」特殊な能力を備えた人にかぎられていたようである。その一人は柔道の高段者で、警察に柔道をおしえていたし、もう一人は歌手の石井好子さんと、モンマルトルの寄席にあらわれ、日本の歌を歌っていた。また別の一人は、養鶏場で生みたての卵を掌中にするや忽ち生れて来る雛の雌雄を言いあてるのを仕事としていた。しかし私は天性虚弱で、格闘を好まず、文弱に流れて、武芸の段を得なかった。また美声にめぐまれず、どこの国の歌にしても、歌を唱って人に聞かせることなどは思いも及ばない。卵の雌雄に到っては、直ちに判別して誤りがないどころではなく、一日なで廻していても到底見当さえつかなかったろう。芸らしい芸は、人間の血液細胞を油浸顕微鏡でしばらく眺めていると、その種類をいいあてるということが出来るにすぎず、それはむしろフランスの専門家にもできることであった。ただ専門家の数が多くなかったから、時と場合によっては、さしあたり「フランス人を以て代え難い」こともあり得る、という程度のことで、たとえ面倒な手続きを踏んでも、結果がどうなるか、甚だ頼りなかったというべきであろう。

(1) 1950年代前半の在留日本人

- ①当時フランスに在留していた日本人は少なく、お互いに名前と顔は一致しなくとも、名前やその人がどんな仕事に就いているかは知っている関係だったろう。1957年にフランスに渡った女優の岸恵子さんも、「加藤との面識はなかったが、加藤がパリに滞在していたことと、加藤の行動について日本人のあいだに流れているうわさは知っていて、会ってみたいと思っていた」(岸恵子談)。

(2) 「フランス人を以て代え難い」日本人

(i) 柔道の高段者

- ①1950年代初めのフランスには何人かの「柔道の高段者」がいた  
②そのひとりには川石酒造之助(1899—1969)である  
③川石は「フランス柔道の父」と呼ばれる柔道家、1935年にパリで日仏柔道倶楽部を設立  
④戦争が始まるといったん帰国  
⑤戦後ふたたび渡仏して柔道を教えた。その教え子のひとりがベルナール・バリゼで、1958年の世界柔道選手権で銅メダルを獲得  
⑥1950年に川石は助手として栗津正蔵(1923—2016)を呼び、栗津は半世紀にわたってフランスで柔道を指導  
⑦1951年に『川石メソッド』(*Ma méthode de judo*)を出版  
⑧講道館は安部一郎(1922—2022)を派遣し、安部は1951年に渡仏し、1954年にフランス講道館連盟を組織した。  
⑨加藤が知っていた「その一人」とは、私の推測では川石酒造之助だろう

(ii) シャンソン歌手の石井好子

- ①石井好子(1922—2010)は、日本シャンソン界の草分け的歌手  
②東京芸術大学声楽科を卒業後に、アメリカを経て1952年にフランスにわたる  
③「パリでシャンソン歌手としてデビューした」といわれるが、「寄席にあらわれ、日本の歌を歌ってもいた」  
④シャンソンを歌っても「フランス人を以ては代え難い」ことにならないが、日本の歌を歌えば「フランス人を以ては代え難い」ことになる  
☞加藤が日本文学史を執筆する理由  
「英国人は日本人の書いたシェークスピア論を読まない。日本人が書いた近松ならばよむだろう」

(iii) 初生雛雌雄鑑別師

- ①「生みたての卵を掌中にするや忽ち生れて来る雛の雌雄を言いあてる」ことは、今日の技術をもってしてもむづかしい  
③ 孵った雛の雌雄は、時間がたてばおのずと分かるが、養鶏業者は、それを待っていたのでは遅い。それゆえ孵った雛の雌雄をただちに鑑別する技術が求められ、この技術を日本では大正時代から発達させていた  
③増井清、橋本重郎、大野勇という研究者が、孵った雛の肛門を開いて生殖突起の有無で雌雄を鑑別する「初生雛鑑別技術」を確立  
④戦前から海外へ鑑別師を派遣していたが、戦争で中断したものの、戦後も多くの国に鑑別師を派遣した  
⑤そういうひとりがパリで「フランス人を以ては代え難い」技術者として迎え入れられた

④ 誰であるかは不祥

第5段落 (157頁、改178—179頁)

しかし許可のおりぬ間、つまりその国で生計をたてることができるかどうかの見透しのつかぬ間、私はそういうことの一切を忘れて暮していた。しかるべき手続きをとった以上、同じことを何度考えても、時間の無駄にすぎない。そればかりでなく、そもそも私は、フランスで長く暮そうと決心していたわけではない。暮そうと思えば、暮すことのできる状態を望んでいたの、いつまで暮すかは、全く別の問題であった。

- (1) 時間の無駄／全く別の問題  
いかにも加藤らしい考え方

第6段落 (157—158頁、改179—180頁)

はじめてパリの街を見たときに、私は大都会というものはどこでも大同小異であると思い、一年の後東京へ戻るつもりでいた。しばらくして、その国の文化に一種の奥行きを感じ、いくらからでもその深さを測るためには、一年程度の滞在は準備期間にしかすぎないだろう、と考えるようになった。私は滞在を延長するのに、少しもためらうことがなかった。しかし滞在の二年に及ぶ頃から、相手の奥行きがとめどもなく深く、そのなかへ入ってゆくと、深淵に吸いこまれてゆくように、遂に出口がなくなるのではないか、という気がしはじめた。その考えには、眼まいというか、ほとんど戦慄に近い感じが伴った。ひとつの文化が、いわば当人の体質のなかに浸みこんでいて、もうひとつの別の種類の文化に接する。その文化が私の観察の対象であるかぎり、元の古巣へ帰ることは、いつでもできる、そういうときには、当人の体質のつくり変えということはおこらない。たとえばトゥロブリアンド諸島へ行ったマリノウスキー。しかし、第二の文化が、単に観察の対象であるばかりでなく、観察者そのものに影響し、その体質をつくり変えるようになると、その過程は非可逆的で、後には退けぬという状況が生じるだろう。たとえば松江に住みついた小泉八雲。そのときラフカディオ・ハーンは、日本社会という対象を観察していたばかりではなく、日本の文化を自分自身のなかに浸透させて、小泉八雲になったのである。しかし第二の文化は、少くとも一面において、第一の文化を追い出さなければ、浸透することができない。その過程は、あの小泉八雲にも一種の戦慄を感じさせなかったであろうか。私はフランス国滞りの延長が、当然のことながら、日本国からの不在の延長になるということを、頻りに感じ、そもそも引きあげるとすれば、あまりに深入りしないうちに引きあげなければなるまい、と思うようになった。

- (1) 大都会はどこでも大同小異

① 今日ではなおさら、大都会というものはどこでも「大同小異」

街には高層建築がそびえ立ち、多くの自動車が行き交い、街ゆく人びとは西洋が発達させた衣服を身にまとっている。ちょっと見には「同じ」に見える。

② この感想はすでに「祖父の家」に述べられる

「西欧の第一印象は、私にとって遂に行きついたところではなく、長い休暇の後に戻ってきたところである」

③ しばらく暮らすと「小異」と見えたことが大事な違いとして意識されてくる

あるいは最初には見えなかったことが見えてくる

⑤ その「違い」を精しく知ろうとすれば、一年や二年暮らしても、はたして分かるものだろうか、という疑問が生まれる

⑥ 留学した人のほとんどは、そういう疑問に捉えられ、かの地に長くともまろうと考え

る。加藤も例外ではなかった

- ⑦ 晩年の加藤に「フランスにとどまることは考えなかったか」と聞いたことがある。その答えは「もちろん考えました」
- ⑧ 考えた結果、加藤は帰国の道を選んだ  
その理由は、「相手の奥行きがとめどもなく深く、そのなかへ入ってゆくと、深淵に吸い込まれてゆくように、遂に出口が亡くなるのではないか」という不安があったからである

## (2) 「第一の文化」と「第二の文化」の関係

### (i) 二つの型がある

- ①ほとんどの人間は生まれたときから慣れしただ文化を身につける
- ②長じて別の文化を身につける機会をもった人が、必ずぶつかる問題がここに記される
- ③生まれながらに親しんだ「第一の文化」を維持するか、「第一の文化」を捨てて、観察の対象であった「第二の文化」を身につけようとするのか
- ④この問題の対処の仕方として、加藤はふたりの外国人を例に挙げる  
ひとり社会人類学のブロニスラウ・マリノウスキー、もうひとり文学者のラフカディオ・ハーン

### (3) マリノウスキー

- ①「マリノウスキー」Bronislaw Malinowski (1884—1942) は、1914年から1918年にかけて、ニューギニアのトゥロブリアンド諸島の現地人調査を行なう
- ②マリノウスキーは、現地語を話し、現地の人びととともに暮らした。その「**参与観察**」(文化人類学の基本的方法)から自身の代表的著作を次々と生みだして、「**社会人類学**」を打ち立てる
- ③しかし、マリノウスキーは現地人になったわけではなく、現地人と結婚したわけでもなく、あくまでも「**観察者**」であり「**第一の文化**」を捨てなかった

### (4) ラフカディオ・ハーン

- ①「ラフカディオ・ハーン」Lafcadio Hearn (1850—1904) は、1890年に来日し、中学や大学で英語や英米文学を講じた
- ②日本文化に関心を抱き、名前を小泉八雲として日本に帰化し、日本女性と結婚し、日本で亡くなった
- ③「**第一の文化**」を捨てて「**第二の文化**」を獲得しようとした
- ④その結果『怪談』ばかりでなく『知られぬ日本の面影』や『心——日本の内面生活の暗示と影響』が書けた

### (5) 両者の共通性

- ①ともに生まれ育った文化を捨てて、別の文化のなかで生きた
- ②マリノウスキーはポーランドに生まれ、1910年、26歳のときに母国を捨てて、イギリスに渡る
- ④ハーンはギリシアに生まれたが、幼時にダブリンに移り、その後もイギリス、フランスに行き、19歳のときにイギリスを捨ててアメリカに渡る  
アメリカはニューオーリンズに職を得て、この頃に黒人文化に触れる

- ④ともに若いときに異質の文化を経験している。そういう経験は、異なる文化に対する関心を深め、異なる文化の価値を認める姿勢になる

(6) 加藤の決断

- ①加藤はフランス文化を深く知るには長期の滞在が必要だと考えた  
②長期に滞在すれば、それは日本文化からの袂別することになる。そして「あまり深入りしないうちに引きあげなければなるまい」と考えた  
③「京都の庭」の章でも触れたが、加藤は医学のためにフランスに行ったのでもなく、フランス文学を生涯の主題とするために行ったのでもない  
④日本文化を知るために、比較対照する軸をフランス文化に求めた。  
⑤フランス文化を身につけるには日本文化から別れなければならないと気づいた。そこで「引きあげる」ことを考えた  
⑥ということは「フランス文化」との別れを意識した、ということであり、これが本章「別れ」のひとつの主題である

第7段落前半(158—160頁、改180—182頁)

その国の言葉、その国の人々との関係、その風俗習慣や季節が、私のなかに浸みこんで、積み重なり、相互に反応しながら、体質の一部をつくってゆくという過程がはじまろうとしていた。「今年の冬は寒いですね」というとき、すでに私は、去年の、また一昨年の東京ではなく、パリの冬を考えた。それは「パリの冬が寒い」という旅行者の感想とは別のものである。過去の経験が、現在の経験の意味を決める。灰色の空が石の壁の間に揺り、降りつづく氷雨が舗道を濡らし、早く暮れる日の夕方カフェのくもった硝子窓の灯があたたかく人を誘う冬。ほとんど太陽を見ないで過した数ヵ月の後に、はじめて、突然訪れる春と青空と並木の若葉とが、かぎりなく明るく、まぶしく、生々として見えるのだ。「春立つ今日の風」を味わうためには、「袖ひちてむすびし水の凍れる」昨日の記憶が新たでなければならない。冬を過した土地で、春を迎えなければならないだろう。しかもそれだけではなかった。もとより私のフランス語の語彙は、はるかに日本語の語彙に及ばなかったが、私が日本語で覚えるよりも先にフランス語で覚えるものの名まえも、次第にその数を増してゆこうとしていた。日本で食べたことのない野菜、見たことのない制度、用いたことのない哲学上の概念……そのどれもが日常生活（および日常の思考）に密接に結びついたものであった。もちろん、辞書のたすけをかりて、私はそういう言葉を翻訳することができる。「栗の木の一種」の「並木のある大通り」を散歩し、「小蝦の一種」や「西洋梨」を食べ、「政府補助金のあたえられている劇場」で芝居を見たり、芝居の「全体をつらぬく主な観念」について考えたり——とすることはできる。しかし頭のなかでそういう風に考えることはできなかった。話が栗や梨から、民主主義や存在に移れば、まさか「民主主義の一種」とか「西洋存在」とかいうわけにもゆかないはずだろう。翻訳はほんとうの問題を解決しない。別の二つの言葉を通じて考えるということは、別の二つのことを考えるということが多かれ少なかれ意味せざるをえない。しかし同じ人物が別の二つのことを考えるのは、おそらく精神にとって致命的であるだろう。私はいくらかフランス語で考えはじめたばかりであった。しかしもしその道を行くとすれば、前途は遠いだろうと感じ、深入りすればするほど、日本語による考えから遠ざからざるをえないだろうということを感じた。それにはよほどの決意が必要である。



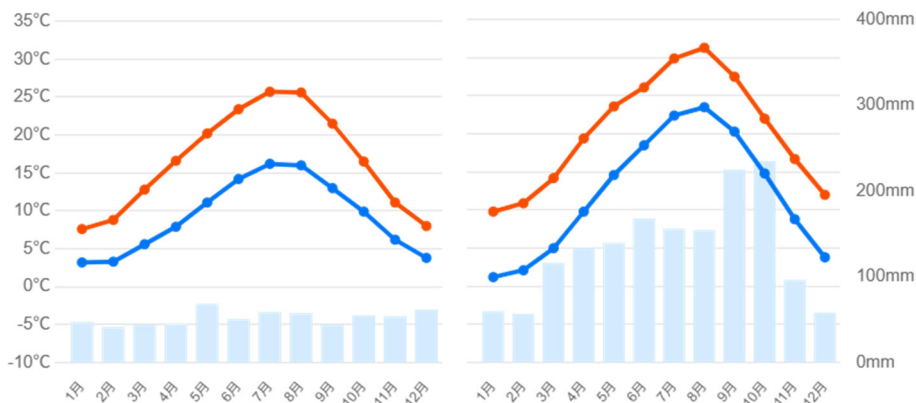
## [1] パリの冬

### (1) 「今年の冬は寒い」と「パリの冬は寒い」という表現の違い

- ① 「今年の冬は寒い」とは、その地に少なくとも数年の冬を経験しなければいけない
- ② 「パリの冬は寒い」という感想は、旅行者も言えるし、その旅行者が普段暮らす地の冬との比較でいえる
- ③ いずれの場合も、「過去の経験が、現在の経験の意味を決める」
- ④ 「パリの冬は寒い」という一般的命題は、過去何十年の統計を調べれば、おおよそその科学的事実をつかむことはできる。何月ごろから気温が下がりはじめ、各月の平均気温が何度で、何月ごろまで続くかということは、パリにいらなくても知ることができる
- ⑤ しかし、それだけで「パリの冬は寒い」という事実を知ったことにはならない
- ⑥ 「灰色の空が石の壁の間に拡がり、降りつづく氷雨が舗道を濡らし、早く暮れる日の夕方カフェのくもった硝子窓の灯があたたかく人を誘う冬」という日常的事実は、科学的事実からは感得できない。それは「その土地に暮らすことによってしか得られない」、経験的事実なのである。
- ⑦ 科学的な経験と体質と化した日常的経験とがどのような関係にあるかは、長い年月にわたってその地に暮らすことによってしか知ることができない
- ⑧ とすれば、その土地にずっと暮らすことを決断するか、その土地を去って帰国するという決断をするか、いずれかにしなければならない。加藤は、どのような決断を下すかについて、深く迷っていたに違いない。

### (2) パリの冬の一般的気象はパリにいらなくても分かる

- ① パリの冬の気温は東京の冬の気温とそれほど変わらない。
- ② パリの冬は曇天が多く、東京の冬は晴天が多い
- ③ 冬の降水量はパリと東京で大きく変わらないが、夏は大きな違いがある
- ④ 東京の夏の気温はパリの夏の気温と比べて高く、湿度も高い。



パリの月別平均最高・最低気温と雨量 東京の月別平均最高・最低気温と雨量

### ⑤ パリの日出時間&日没時間

2025.1.1.日出 08:38、日没 17:15。明るくなるのは9時を廻る。

2025.7.1.日出 06:04、日没 21:51（夏時間）

- ⑥ 日照時間の長さは緯度（パリは北緯約49度≒ユジノサハリンスク）にかかわる  
緯度の高さのわりに暖かいのはメキシコ湾流の影響

### (3) 「復活祭の頃の陽気」

- ① 太陽を見ることが少ない冬が突然に終わると、太陽の光は輝き、青空が広がり、花は咲

き、緑が目にしみる。すべてが生き返り、甦ってくるような感覚に襲われる。まさしく「復活」、ちょうど「復活祭」の頃のこと(nb)トルストイ『復活』の冒頭部分

(4) 「袖ひぢてむすびし水の凍れるを……」

- ①「袖ひぢてむすびし水の凍れるを 春立つ今日の風やとくらむ」(紀貫之『古今和歌集』所収)は、立春を迎えた喜びを詠んだ歌
- ②袖を濡らして手ですくった水は、冬の寒さに凍ってしまったが、春が訪れるこの日に、あたたかい風がとかしてくれるだろう、というほどの意味である。昨年の冬の寒さを経験してこそ、今年の春に氷が融ける喜びが感じられる

(5) 「灰色の空が石の壁の間に拡り、降りつづく氷雨が舗道を濡らし、早く暮れる日の夕方カフェのくもった硝子窓の灯があたたかく人を誘う冬」

- ①ここに書かれる描写は加藤の実感
- ②加藤が留学中に書いた詩歌に表現されている (デジタルアーカイブ参照)

(6) 「硝子窓の灯があたたかく」

- ①あたたかく感ずるのは、蛍光灯の明るい灯りは使わずに、黄色系の灯りが多いからだ
- ②夜間に飛行機でパリに離着陸すれば、窓外に拡がる景色は闇のなかに輝く黄色の光の海

[2] 言葉

(1) 覚える語彙

- ①「日本語で覚えるよりも先にフランス語で覚えるものの名まえも、次第にその数を増してゆこうとしていた」のは当然である
- ②覚えた語彙群によって、その人の考えが決まってくる

(2) 日常生活 (および日常の思考) に密接に結びついたもの

- ①ガブリエル・マルセル《*Etre et Avoir*》(1935) は、英語訳は《*Being and Having*》、日本語訳は『存在と所有』(今日でも変わらず)
- ②学術用語と日常語の不連続性を指摘したのは内田義彦

(3) 「辞書のたすけをかりて……」

- ①「栗の木の種類」: **marronnier** ⇔ **marron** は栗の実
- ②「並木のある大通り」: **Boulevard**
- ③「小蝦の種類」: **crevette**
- ④「西洋梨」: **poire** (実)、**poirier** (木) ⇔ ラ・フランス **La France** はひとつの品種名
- ⑤「政府補助金のあたえられている劇場」: **Théâtre nationale**
- ⑥「全体をつらぬく主な観念」: **le thème**

(4) 言語とアイデンティティ

- ①「別の二つの言葉を通じて考えるということは、別の二つのことを考えるということをもたれ少なかれ意味せざるをえない」⇔ 母国語とアイデンティティ
- ②数カ国語に堪能 ⇔ 母国語の喪失 ⇔ アイデンティティの喪失
- ③これも加藤の帰国を促したひとつの理由